地球号の子どもたち 第22回

国際協力で自分の将来を導く力を

東京最西端、高尾山のふもとにある聖パウロ学園高等学校。〝将来の自分を描く〟キャリア教育の一環として生徒たちが手作りの国際協力を展開中だ。

高尾の森ではぐくまれた取り組み

11月中旬、黄金色の銀杏で彩られた東京都八王子市―。さわやかな秋晴れの週末、高尾山を望む町の至る所に露店が出ている。地域で採れた新鮮な野菜、手作り感あふれる雑貨やお菓子…。この日は「第31回八王子いちょう祭り」の最終日。毎年30万人以上が来場する地域を代表するお祭りだ。

「いらっしゃいませ!」

高尾駅から徒歩で約20分、紅葉で鮮やかに色付いた陵南公園に着くと、学生たちが笑顔で出迎えてくれた。「ようこそ!学生広場へ」と書かれた看板の先―。若者でごった返すその一角で、かわいらしい、エキゾチックな雑貨が並ぶブースに目が止まった。布製のバッグ、お財布、髪飾りなどが、所狭しと並べられている。

「マレーシアの女性の手作りなんですよ」

そう教えてくれたのは、聖パウロ学園高等学校1年生の髙橋絵里さん。同校が八王子いちょう祭りに参加するのは今回で2度目。ブースでは、パウロ生が授業の一環で製作した写真立てや小物入れなどのネイチャークラフト、陶芸のお皿と並んで、マレーシアの職業訓練校で製作されたという小物が販売されていた。

「私たちはこの職業訓練校と交流があるんです」

聖パウロ学園高等学校は、東京の西端、多摩地区の緑豊かな〝パウロの森〟にたたずむ高校。その恵まれた自然環境を活用して、乗馬や陶芸、森での間伐体験など、個性的なカリキュラムを提供していることでも知られる。さらに2009年からは、キャリア教育の一環として「キャリアアッププログラム」をスタート。地域の幼稚園や保育園、特別養護老人ホームや病院でのボランティア活動などの中から、自分の好きなプログラムに参加できる。その一つに取り入れられたのが〝国際協力〟だ。

「都心の学校と違って、海外からの情報や外国人に接する機会が少ない。途上国に目を向けることで、自分の視野を広げるきっかけになればと」。そう話すのは進路指導部の小島祐介先生。「部活動にしてしまうと、特定の生徒しかかわることができない。できるだけオープンな形にして、興味のある生徒がいつでも自由に参加できるようにしたかったんです」。

昨年のパウロ祭では、マレーシアの現状についても展示(左)。モンフォート職業訓練校では、和崎隊員によりその様子が紹介された(右)

「マレーシアの人たちの助けになれば」

聖パウロ学園にとって、〝国際協力元年〟となった09年―。「キャリアアッププログラム」を担当する小島先生たちは、市民の国際協力の窓口、JICA地球ひろばを訪問。世界の問題について学べる展示やフェアトレード製品の見学を通じて、高校生にできる国際協力のアイデアをふくらませた。

「NGOの方から、フィリピンのごみ山で働く子どもたちの話を聞いてショックを受けました。今までまったく知らない世界だったので…」と話すのは3年生の横川真依子さん。まずは身近な所から国際協力を広めたい―。生徒たちはJICA多摩地区デスクの国際協力推進員・依田武則さんとともに知恵を絞り、環境に優しい、英字新聞で作ったエコバッグ、フェアトレードコーヒーを販売することに決めた。

小島先生(左)と一緒にフェアトレードコーヒーを販売

最初の舞台は、9月の学園祭「パウロ祭」。モノを売るだけではない、お客さんにフィリピンの〝現実〟を伝えるために情報収集にも励んだ。「モノを売ることが初めてだったので大変でした。でも私たちの話を聞いて、お客さんが買ってくれた時は本当にうれしかった」と横川さんは振り返る。

そして今年度、新たに実現したのがマレーシアの職業訓練校との連携だ。きっかけは昨年8月、小島先生が参加したJICAの教師海外研修※。視察先の一つとして、青年海外協力隊の和崎亜由美さんが裁縫技術を指導するサバ州のモンフォート職業訓練校を訪問した。「せっかく作っても、なかなか販売する場所がないと聞いて。何かお手伝いができればと思ったんです」と小島先生。16~20歳の女性たちが作った小物は、海を渡り、聖パウロ学園の生徒たちの手によって販売された。「少しでもマレーシアの人々の助けになれば」と生徒たちは口をそろえる。

キャリアアッププログラムの一環で国際協力の取り組みが始まって1年半―。参加した生徒の中には、国際協力分野の大学進学を目指して受験勉強に励み、見事合格した子もいる。しかし小島先生は「正直言うと、直接、国際協力に結び付かなくてもいいと思っているんです」と話す。「活動を通じて、いろいろな人と触れ合うことで、自分自身を見つめ直し、将来への道筋を導き出してもらいたい」。

今、少しずつ芽を出しつつある〝パウロの森〟の国際協力の種。その芽はまだ小さいかもしれない。でもしっかりと確実に、生徒たちの胸に根付いてきている。

※国際理解教育・開発教育に関心のある教員を対象に、JICAが毎年実施している開発途上国での研修プログラム。JICAの支援国で国際協力の現場を視察し、帰国後、参加者はその体験を授業などに生かしている。募集の詳細は、最寄りのJICA国内機関へ。

「八王子いちょう祭り」でブースを出展。マレーシアの雑貨を販売した

「このシュシュかわいい!」。思わず髪飾りを手に取る女の子

マレーシアのモンフォート職業訓練校の生徒たちの作品